

ニュースレター vol.7

会員の皆様へ

このニュースレターは、会員相互の情報交換を目的に、会の活動内容とともに会員個人の様々な活動などについてお知らせするものです。

下記に会の行事予定を載せましたので、みなさまの参加をお待ちしています。幹事会にも興味のある方は、気軽にいらしてください。

エッセイは、幹事の村田雅尚さん、幹事長の林知幸さんに書いていただきました。

村田さんは、「カルタゴ」と「ローマ」の戦い、興亡について書かれた2冊の書籍を紹介してくださいました。ニュースレターでは初の書籍紹介で、今後もいろいろな書籍を紹介くださるとのことですので、乞うご期待です。

林さんは、ご自身の学生時代の思い出と、今年はじめて白門技術士会として出店した白門祭に参加された感想を書いてくださいました。当時の時代背景や林さんの心意気がうかがわれる楽しいエッセイです。

では、ニュースレターをお楽しみください。

白門技術士会行事予定

	行事	日程	内容
1	CO2環境対策技術研究会 幹事会	2009年1月22日(木) 18:30~	場所：後樂園キャンパス内
2	講演会：技術者にとってのデータベースの効率的活用について	2009年1月30日(金) 18:30~	場所：鶴見大学会館 講師：鶴見大学ドキュメンテーション学科教授 岡田靖先生
3	幹事会	2009年2月20日(金) 18:30~	場所：学会会会議室(715) 須田さん受賞お祝い会
4	講演会：首都圏直下型地震への備え	2009年3月4日(水) 18:30~	場所：後樂園キャンパス内 講師：中央大学工学部土木工学科教授 國生剛治先生
5	CO2環境対策技術研究会 第3回研究会	2009年4月23日(木) 13:00~	場所：流山クリーンセンター 詳細は後日
<p>付記：各講演会共に、CPD「1.5単位」が付与されます。(CO2環境対策技術研究会のCPDは単位数が異なります)</p> <p>講演会参加費用：各1500円(CO2環境対策技術研究会の参加費は別途御連絡します)</p> <p>講演会后、懇親会を予定しています。</p>			

エッセイ - 1

「ある通商国家の興亡 カルタゴの遺書 / ローマ人の物語 ハンニバル戦記」:

村田雅尚 (電気電子部門)

本棚を整理してローマ人に関する本を手に取りペラペラとめくっていたらつい時間のたつのを忘れてしまった。ローマ人に関する本との出会いは、まず森本哲郎氏のカルタゴについて読んだのが始まりである。「ある通商国家の滅亡 カルタゴの遺書 PHP 研究所」という本だ。

(この本はオンデマンド版で取り寄せたものだ。数年前オンデマンド本はずいぶん高価だったが今はどうなっているのであるだろうか? ちょっと話が横道にそれた。失礼。)

さらに、その後に塩野七生著の「ローマ人の物語 / ハンニバル戦記 (上、中、下) 新潮文庫」を読んだ。結局ローマ人の物語は今 5 冊目で読むのが止まっており、これから時間をかけてじっくり読もうと思っている。塩野七生著の「ローマ人の物語 / ハンニバル戦記」は臨場感伝わる文章で引き込まれる物語に仕上がっている。一方、森本哲郎著の「ある通商国家の滅亡 カルタゴの遺書」は、どうして滅んでいったのか、その文化の背景を現代社会との対比を含めて記載しており非常に面白い内容になっている。

カルタゴがローマと戦った話を知らない人に簡単に内容を説明すると、カルタゴとはローマと 3 回の戦争 (ポエニ戦争) で滅んだ古代の国である。

カルタゴとは今の北アフリカのチェニジアにある都市にあたる。

現在は地中海のきれいな都市であり、SF マニアならスターウォーズの撮影でも知られた場所であることを知っている人は多いだろう。

ローマと戦ったカルタゴの名将ハンニバルは歴史に残る戦略家であり、そのような人物がいても滅んだ国カルタゴのことを書いている。

(大ヒット・スリラー「羊たちの沈黙」(91年)の続編で「ハンニバル」アンソニー・ホプキンス主演があるが、もともとハンニバルは滅亡した古代カルタゴの名将の名前) 古代に技術と経済の大国でありながら滅んでいった過程から、現代の日本やさらに会社や事業のことまで比喻して述べる書評も多い。

カルタゴ滅亡原因は何か? 一言で表現するのは難しいが、おそらく「失敗に学ばず自己の利益のみに固執した。」と言える。

このようなキーワードで話すと、最近ではサブプライムローン問題で低下しつつあるアメリカの姿が重なるから歴史とは奇妙なものである。

興味ある方は、ローマ人、ハンニバル、カルタゴに関する本は多く出ているので、ぜひ

読んでみると現代社会との奇異な共通点を見つけられるのではと思う。

エッセイ - 2

「白門祭今昔」：林知幸（上下水道部門）

第1章 ピンクのマニキュア

高校時代、軟式野球部と化学部に所属し、さながら「晴耕雨読」といった少し欲張った生活を送っていました。「化学部」では、教科書にない実験や調査の面白さを味わっていました。例えば、文化祭にいろいろな色の「マニキュア」を作って女子生徒に配っては悦に入っていたのです。

この「マニキュア」は、もう一つの部活「軟式野球部」に効果を発揮したのです。それは、野球を知る人には判ってもらえること、ボールを投げる人（ピッチャー）は、指先に力を入れるため「爪が割れる」傷害がつきものなのです。そこで、余った「マニキュア」を野球仲間に渡して使ってもらった。私は（キャッチャー）がポジションであったので、ピンクのマニキュアをした投手からのボールを受けていた「変な女房役」でした。このように、化学部の成果品と軟式野球部の実用性がコラボレーションした経験を味わったものです。

第2章 汚れた白衣で

理工学部入学後、体育の科目でどうしても「野球」を選択したかったのですが、グラウンドが遠く（確か小金井だった？）次の時限に間に合わないで泣く泣く断念したのでした。

そんなこともあり、各学科にぶら下がった部活に相当する「**研究部」があり、「化学研究部」（化研）に入部。ここでは、当時下水の整備が遅れて、洗剤の泡が浮かぶ多摩川、悪臭漂いレガッタも中止になる隅田川の水質調査を行っている班に所属しました。この背景に、「マニキュア」を作っていた傍らで、高校の近くを流れる善福寺川の水質検査を継続している班があったことがありました。

化研に所属してからは、月2回のペースで多摩川、隅田川に架かる橋の中央から瓶をたらし採水したサンプルを部室に持ち帰り、分析項目に従って分析を行っていったのです。隅田川を例にとると、上流から「岩淵水門」「尾竹橋」「白髭橋」「厩橋」「関橋」であったと記憶しています。「厩橋」に行く場合は、大学の前（停留所名：富坂二）から16番の都電で厩橋まで直行で行けました。しかも、2人から3人の組で白衣姿のまま都電に乗り込んでいったものです。白衣を着て街を歩いていた人は、新宿のガード下でアコーディオン、ハーモニカを弾いていた（傷痍軍人）がまだいた時代です。他人の目を全く気にしない、逆に何か優越感に似たものを持っていたのかもしれない。

参考資料として、都電の「路線図」を添付します。懐かしい停留所が見つかるかもしれません。



(広報部会注：都庁を訪ね、無理をお願いしてコピーをいただいたものとのことです)

第3章 眠気と蒸気

もう一つの川、多摩川の思い出を。夏休みのこと、多摩川に架かる二子玉川(二子橋)の橋の下にキャンプ用テントを張り、「本流」と支流の「野川」、「仙川」から2時間毎のサンプリングを3日間行いました。前日の夜間から朝までの試料を手提げ袋に抱えてキャンパスへ持ち帰るのですが……。

前日からの徹夜で、新宿から乗り込んだ総武線各駅停車で水道橋駅へ。それから徒歩で……。

飯田橋駅までは記憶がありましたが、「次で降りて??」。気が付くと窓の外には蒸気機関車が?

たしか、幕張の操車場だったと思います。都内には走っていませんでしたが、外房線か内房線にはSLが走っていた時代だったのです。慌てて起き、リターン。座ってしまうと今度は高尾駅になってしまいそう。当時国鉄の定期券を持っていたので、この旅は運

賃「0円」でした。

第4章 サービスも

ここまできて、やっと「白門祭」に触れることになります。

「化研」で、隅田川、多摩川の水質調査を行ってきましたが、この分析だけが部活ではありませんでした。実はあるスポンサーが付いていたのです。(ある企業が1つの大学のしかも部活に援助を行っていたのです)

「化研」は、その企業のバックアップもあり、専門誌へ年間の調査結果を「論文」投稿していました。

当然係わった学生の名前が全て掲載されたことはいうまでもありません。大学2年生から専門誌の論文に「自分の名前」が掲載されるということになりました。

実は、このときから、研究結果を発表することの大切さと、論文の書き方を「部活」から学んだことが、会社での実験結果報告書作成、あるいは工業所有権の「ややこしい」言い回しの文章作成にあまり苦労しなかった下地造りになったものと思っています。

まだ白門祭が出てきません。

「化研」にはいくつかの班がありました。我々のように「水質調査」をする班、独自の合成を考える班(「マニキュア製造」みたいな)などの、年間の成果発表が「白門祭」でした。(やっとここにたどり着きました) 自分たちは、毎年専門誌に発表しているし、その内容を模造紙に書き写して「祭典」に臨んだのでした。

その他の班は、例えば「中央大学の(C)の字」を型にした「石けん」を造って配ったりしていました。(またまた「マニキュア」的発想です)

各班の担当者は、訪ねてくる学生(おじさん、おばさん、子供、どこかの女子大生)を相手に説明に追われたものです。理工学部の学生として「それなり」の立場を守って臨んだ「白門祭」でした。

第5章 おじさんの独り言

時代は流れて2008年、ここは後樂園キャンパス。

「白門技術士会」が創設4年目で、母校の白門祭に出店できたのです。

出店に至るまでには、この限られた紙面ではとても書ききれないいろいろな出来事があったと書くと、「ドラマ」になるのですが、種明かしは簡単。「技術士1次試験に合格した学生(I君)」がいたことです。彼の交渉力と行動力で「白門技術士会」が出店できたのです。

さて、約40年ぶりの白門祭を体験しました。企画、運営全てを学生が行っており、大学側は一切口も手も出せないことを知り、「確か我々もそうだったな」と思い出した。全てを見たわけではないけれど、研究室の公開、各種クラブの生演奏があり、野外ステージでは「お笑いグループ」の演技などが行われており、学生のお祭りとしてそれなりの体裁は整っていたようです。

その中で、な、な、何と私が所属していた、あの「化研」が生きていたのでした。その

後輩たちは、「人工イクラ」の製造を、小さなピーカーでデモを行っていたのです。それはそれで価値のある展示とは理解したものの、彼らから一通りの説明を聞き、一抹の寂しさを覚えました。

当時の「化研」は、社会の中で未熟ではあるものの、有機化学、無機化学、社会問題に係わったテーマを掲げて、その成果を「大学の講義では得られない」何かを発表したことと比べてしまったのです。

決して、現在の学生諸君の活動を批評する気は全くありません。

但し、化学を学ぶ学生が所属するクラブであるならば、「地球の将来」を「化学の力で」「救う」「提案」を掲げた、学生の立場で自由な発想と発表を行ってもよいのではないかと、思った次第です。

来年の「白門祭」にも参加して、「白門技術士会」を知らしめる役を果たしたいと思います。

(編集：白門技術士会広報部会)

